

ど中国全域に広がっている。

時代的には、大汶口文化初期、すなわち紀元前四五〇〇年頃から中期にわたってもっとも盛んであるが、大汶口文化晩期から急速に減少し、崑山文化期になると次第に消滅してゆく。その後の時代のものでは、山東省城子崖における戦国時代の墓葬から発掘された、成年男子五体の右側上顎側切歯の抜去例が報告されているが、他には信ずるに足る報告はない。しかし文献によれば、この風習は一部の民族によって引きつがれ、近代まで続いていたようである。

欠歯の実状は、性別では男女共に高率に現れ、年齢は幼少年期には見られず、十四歳前後の成人期に行われている。

欠歯部位はほとんどの例（四五二例中四〇二例）が両側上顎側切歯である。これは、我国縄文時代の複雑な欠歯様式とは著しく異なるものである。

有史時代になると、前記の戦国時代の例を除いては、すべて文献に見られるのみである。文献は周秦時代の作といわれる『山海經』を初めとして、近代清朝に至る各時代に存在する。これらの文献によれば、欠歯を行う民族は、初め僚と呼ばれ、後に仡佬、さらに、打牙仡佬と呼ばれる民族である。打牙仡佬における欠歯の風習は、十九世紀半ばまでは結婚に伴う風習として存在したが、それ以後は完全に廃れてしまった。

欠歯の部位はほとんどが両側上顎側切歯であるため、それから欠歯の意義を推察することはできないが、実施の年齢が成人期であること、男女とも高率に行われていることに基き、また後代の

文献を参照して考察すれば、欠歯は成人式又は婚姻儀礼の一環として行われたものと考えられる。なお文献によれば、服喪の儀礼としても行われることがあったようである。

（平成元年十一月例会）

済生学舎の歴史について

唐沢 信安

済生学舎がなぜ「廃校」になったかについては、今日大きな謎を残している。また、済生学舎が、現在の日本医科大学の源流になっている事もあまり知られていない。

済生学舎は、明治九年四月九日、長谷川泰によって創立された医術開業試験のための医学校である。泰の師である順天堂の佐藤尚中の遺志である洋方医の早期養成を受け継いで、多くの医家を世に送った。その中で、野口英世や吉岡弥生等の学者や指導者がこの学校の出身者となっている。

また、済生学舎が廃校になったのは、長い間の東大赤門派閥の指導者との闘争史であった事を忘れてはならない。

明治二十三年頃になると、森鷗外や青山胤道（後の東京帝国大学医科大学学長）等が会談して済生学舎の教育を批判痛罵するようになる。それは森鷗外の『医育論』の中で見る事ができる。

次いで、明治三十一年の暮より三十二年の春にかけて「医師会法案事件」なる物が起った。全国の開業医四万人が、自らの権利と品位の向上を求めて、大日本医会を通じて国会に医師法案なる

ものを提出した。

これに対して、約六〇名の東大医学部教授達を中心とした「医師会法案反対同盟」が結成され、猛烈な反対運動が展開された。その時の反対運動の指導者は、元済生学舎の講師で、長谷川泰に幼少時代より眼をかけられて来た、同郷（新潟県出身）の入沢達吉であった。入沢達吉の思想は次のようであった。

(一) 正規の官立医学校や東大出身者と、「医師開業試験合格者」および従来の漢方医より洋方医に転じた医師と同一の法律の下で「医師法案」を論じることができない。（医師の差別論）（官尊民卑の思想）

(二) そのために医師開業試験を全廃して、私立医学校の粗悪な速成教育を廃し、官立の大学と専門学校のみとし、医学のレベルを高め、日本の医学教育を先進国並にしなければならぬ。（医学教育の統一論）

(三) 右の目的の障害になっているのが長谷川泰の経営する「済生学舎」である。したがって文部省と相談の上、法律の力で済生学舎を潰すのが当面の問題である。

この思想的政治運動により、医師会法案は衆議院は通過するも貴族院で廃案となった。勢いを得た反対同盟の人々は名を「明治医会」と改め、右の医師開業試験廃止と、私立医学校の廃校を目標に「専門学校令」を發布して泰に迫った。長谷川泰は、薬律改正の問題もからみ、四年間衛生局長の座にあったが辞し、済生学舎を守るために努力した。

苦難の末、ギリギリの線まで退き、ついに禅の道（仏門）に入

ることすら考えた。その結果の廃校宣言であった。後に残された学生の事を考える余裕さえなかった。残された学生と教師は「同窓医学講習会」をつくり、日本医科大学への掛橋をつくった。（平成二年一月例会）

日本占領下のフィリピン薬用食物研究

津谷喜一郎

WHO西太平洋地域事務局初代伝統医学担当医官として、一八四四年よりほぼ五年、マニラを拠点に、極東、東南アジア、南太平洋の各国の伝統医学の普及発展活動に従事した。この間各国で伝統医学の研究状況を調査するうちに、折々日本が第二次世界大戦中に行った薬用植物の研究に触れることがあった。それらは、朝鮮、中国、ベトナム、シンガポール、フィリピン、ジャワ、パプアニューギニア、南太平洋の島嶼など、「大東亜共栄圏」の版図の中である。このうち、フィリピンについては、フィリピン側の資料を中心に、今回と同じタイトルで『日本医事新報』三四一〇号と三四一一号に上・下に分けて発表した。今回は、フィリピンの薬用植物研究の歴史とともに、その後得ることができた日本側の資料を交えて報告した。

フィリピンの薬用植物研究の歴史は、四期に分けることができる。まず十六世紀に始まるスペインによる統治下の主に神父によってなされたものである。もっとも初期のものは一六一一年フランシスコ派の神父フラス・デ・ラ・マドレ・デ・ディオス (Blas de la Madre de Dios) による。その他にも何人かの神父による